

アメリカ啓蒙思想と『ヨブ記』

——Franklin と Paine の場合——

明 石 紀 雄

はじめに

本稿の目的は、18世紀の啓蒙思想時代のアメリカにおいて、「ヨブ記」がどのように読まれていたかを検討することである。とくに代表的なアメリカ啓蒙思想家として Benjamin Franklin と Thomas Paine の2人を選び、彼らの著作などにおいて、「ヨブ記」がどのように言及されているかを見てみたい。

18世紀——より厳密に言えば、その後半——のアメリカにおいては、一般的に伝統的信仰の態度がうすれ、それに代わって合理主義的傾向が現われつつあった。むろん既存の宗教は、思想的にも社会的にもいぜんとして大きな影響力をもっていたが、これらもまた新しい神学の台頭にいかに応えるかという課題に、直面せざるをえなかった。本稿においては、このような当時の思想的背景との関連において「ヨブ記」がどのように読まれていたかを見るが、究極的には、旧約聖書中の特定の書にたいする一般的関心を明らかにするだけでなく、18世紀アメリカのいわゆる「知的雰囲気」(climate of opinion)をも明らかにしたいと考える。

Franklin と Paine を選んだ理由についてひと言触れておきたい。貧しい印刷工として出発した Franklin が、後に教育者、科学者、政治家、外交官として活躍し、アメリカ植民地のイギリス本国からの独立に大きく貢献し、建国初期のアメリカにおいて指導的役割を果たすようになった話はあまりに有名である。Thomas Carlyle が彼を“the Father of all the Yankees”と

呼び、D. H. Lawrence が “the first downright American” と呼んだことはしばしば引用される。(いずれも軽べつ的に彼をこのように呼んだ、というのが通説となっている。) とするならば、Franklin が18世紀の代表的なアメリカ人あるいは当時の時代的風潮をよく体現していた、という解釈も出てくるはずであり、事実彼についてはこのような人間像が定着している。他方、Paine は *Common Sense* により、イギリス本国から分離独立することこそがアメリカにとって真の平和と繁栄の道であることを説いたが、これは「アメリカ独立宣言」より約半年早い時期であった。(1776年1月10日)このパンフレットは、独立にたいして態度を決しかねていた人びとにたいして大きな影響をあたえたといわれている。しかし彼が自然科学に深い興味をもっており、彼の既成秩序批判が、自然の観察にもとづいて得られた洞察にもとづいていることは案外知られていない。Paine を18世紀の啓蒙思想家の1人として見るのは、彼の熱烈・急進的な政治思想のゆえだけでなく、彼の科学観からも出てくるのである。

I Franklin と Paine の理神論

代表的なアメリカ啓蒙思想家たちの宗教思想は、一般的に理神論 (Deism) であったと規定されている。しかしこのような単純化は、いくつかの問題を含むものである。少なくとも、各個人間における理神論の微妙な違いを見失なわせるおそれがある。

確かに宗教の本質について、多くの啓蒙思想家は共通した見解をもち、既存の宗教にたいして批判的であった。「イギリス理神論の父」といわれる Lord Herbert of Cherbery (1583—1648) は、(1)神の存在を信じること、(2)神を崇拜すること、(3)道徳の実践、(4)罪の悔悟、(5)靈魂の不滅を信じることは、あらゆる宗教に共通する根本原理と考えたのであったが、このような理神論の立場は、アメリカの啓蒙思想家に多く見られるものであった。

理神論においては、人間の理性だけが宗教を考える際の信頼すべき唯一の

道具とされ、他のいかなる権威も不必要であるとされた。またここにいう神とは、いわゆる人格神ではなく、宇宙の創造者つまり自然神を意味した。したがって理神論者にとって、宗教的行為とは自然を観察しそれについて考察することであり、被造物たるにふさわしい生活を営むことだった。彼らが既存の宗教にたいして批判であったのは、それらが超自然的権威（啓示）あるいは人為的権威（教会）に依存していたからである。¹

しかし上述したような本質的な見解の一致にもかかわらず、理神論者のあいだには、彼らの信仰（思想）の表現や道徳の実践あるいは教会批判の程度において、いくらかの相違があった。つまりニュアンスの違いが存在したのである。

Franklin や Paine の場合はどうであったであろうか。Lord Herbert のいう宗教の根本原理について、両者はほぼ見解を同じくしていたが、強調の度合はそれぞれ異なっていた。また既存の宗教批判においても、Franklin はどちらかといえば穏健的であったのにたいし、Paine は戦闘的であった。さらに詳しく見るならば、次の点が指摘できよう。

(1) 神の存在ならびにその崇拜について

Franklin は1728年に、自らの信仰告白ともいうべき “Articles of Belief and Acts of Religion” を著わし、そのなかで次のように書いている。

「私は唯一至高の最も完全なるものが存在し、それがもろもろの神の創造主であり、父であることを信じる。（中略）

このようにして造られた諸々の神 [Franklin は一種の汎神論を信じていた——筆者注] は、すべて賢明であり、善良であり、秀れた能力をもつものである。それらはすべて一つの太陽を造り、素晴らしい、賛美すべき惑星群をそれに加えている。私が礼賛と崇拜の対象として推奨するのは、われわれの太陽系の創造主である、かの賢明で善良なる神である。²

Franklin の神が汎神論のそれであったか、あるいはむしろ多神論のそれであったかを論じることは、この際あまり重要ではない。彼が神を信じ、そ

の神とは彼が自分の眼で見ることのできる自然の創造主であり、彼にとって信仰の第一歩はこのような神の存在を認識することにあつたのは、彼の言葉から明らかである。彼が自然の観察に最大の関心をはらつたのは、このような理由によるものである。

他方、Paine の宗教的見解は *The Age of Reason* (1794—95) に明らかである。神について、彼は次のようにいっている。

「私は一つの神を信じます。それ以上は何も信じません。」

「神の言葉は、われわれが見るこの創造の世界である。神がすべての人間に語りかけられるのは、いかなる人為的手段によっても模倣し変えることができない、この言葉を通じてであります。」³

Paine は、また神を「第一原因」とも「偉大な機械工」とも呼んでいる。⁴ そして人間は、理性の力により、また「理性の力を通してのみ」、神の存在を知ることができるとする。かくて Paine も Franklin と同様に、宗教的信仰の始まりは自然の観察にあるとしていたのである。

(2) 道徳の実践について

Franklin と Paine は共通して、道徳の実践を説いた。すなわち道徳的に秀れた人となることが、全知全能の神の被造者としてもっともふさわしい生活の目標とされたのであつた。それは、神を賛美し礼賛するための、もっとも望ましい行為とされた。したがって彼らにとっては、自らに厳しい規律を課し、試練を与えることは、決して苦痛なことではなく、むしろ悦びですらあつたのである。

Franklin はいう——

「私は自分より下のものにたいして親切であり、礼を尽し、寛大であり、思いやりの心もてるようになりたいと思います。また罪もなく苦しんでいる人びとに接する時、きびしくしたり……強圧的にならないことを願うものであります。父なる神よ、どうかお助け下さい。」

Paine も同様に、道徳の実践の必要性について次のようにいっている。

「私は人間の平等を信じます。また宗教的義務とは、われわれの同胞にたいして正義を行ない、思いやりをもち、彼らを幸福にすべく努力することにある、と信じます。」⁵

他人にたいする思いやり（博愛主義）の強調は両者に共通して見られる。しかし、克己（禁欲）主義的傾向が一貫して見られることも、特徴的である。理性の命じるところにしたがい、快楽・苦痛にまどわされず、清廉潔白な生活を営むことが理神論における道徳実践の意味であるならば、ここには古代ストア主義に通じるものがあると見てよいのではなかろうか。

(3) 既存の宗教——とくにキリスト教——批判

創造された世界すなわち自然こそ神の力を示し、その知恵の偉大さを証明し、その善意を顕現しているとする理神論の見解が、聖書を神の言葉の記録であると信じその権威のうえに信仰の基盤をおくユダヤ＝キリスト教の伝統と相容れないのは、明白である。18世紀の神学論争に詳しく立ち入ることはできないが、理神論の側からの攻撃が、穏当な啓示概念批判から啓示にもとづく宗教の全面的否定へと、さまざまな立場からなされたことは指摘しておきたい。そして Franklin と Paine のあいだの根本的な違いはまさにこの点、つまり伝統的宗教をどう見たかにあったのである。⁶

II 「この世はいと素晴らしい」(Franklin のヨブ観)

Franklin の理神論は、他の啓蒙思想家のそれと比較して、かなり異なった要素を含んでいた。いいかえれば、彼の理神論には特有のニュアンスがあった。このようなニュアンスは、主に、彼自身のパーソナリティー、彼の育った家庭的・社会的環境、そして彼の行動の場が18世紀の新世界アメリカであったという事実による。

まず、ピューリタニズムの影響がある。Franklin をピューリタン世界の(最後の)産物と見るか、それとも啓蒙時代に属する人物と見るべきかは、長い間議論されてきた点である。彼に見られる克己（禁欲）の精神および自

己を内省的に観察するという習慣は、彼の生まれ育った Boston の知的・文化的状況と、彼の家庭におけるピューリタンの教育の影響であったとするのが妥当な解釈であろう。

次に、パーソナリティーという観点からすれば、Franklin には、人間には抑制しがたい欲求があり、一度形成された習慣は容易に改めることができないことを正直に告白する一方、他方では人間性の限界をやさしく見守るという面もあった。彼は、ヒューマニストだったのであり、完全に冷徹な理論家タイプではなかったといえる。たとえば有名な *Autobiography* のなかの、いわゆる「道徳的完成」という「大胆な計画」についての彼自身の評価は、この点を如実に物語っている——「私は、まもなく思っていたよりずっとむずかしい仕事に手をつとんだことに気がついた。何か一つの過ちを犯さないようにと気をつけているうちに、ほかの過ちを犯してしまう。うっかりしていると……性癖のほうが理性よりも強くなってしまふことがたびたびあった。」⁷

Franklin の宗教思想を特徴づける要素をさらに二つあげるならば、一つは楽観主義であり、他の一つは宗教の果たす社会的役割についての彼の保守的な考え方である。彼のこのような保守性こそ、Paine の戦闘的理神論との違いを生んだ最大の原因だった。

Franklin の宗教思想における楽観主義が、彼のヨブ観を特徴づけるといっても過言ではあるまい。1734年8月、彼は自分が経営していた週刊紙 *Pennsylvania Gazette* に、いずれも読者からの寄稿という形で、二つの小品を書いた。(1日～7日号)それらは“*The Parody*”ならびに“*The Optimistic Meditation*”と題されていた。⁸

この二つの小品は、ある意味において、Franklin によるヨブへの返答と見ることができる。まず彼は“*The Parody*”の前文において、それを書くにいたった経緯を説明する。

「貴紙最近号に掲載されました、瞑想の形式をとって書かれた人生につい

での悲観的な記事は、読者のなかで物思いに沈み、人生を憂うつに感じておられる人たちは大層気に入ったことでありましょう。しかし、私は、物事の暗い面を見ることは好まないであります。さらにいいますれば、人生についてこのように悲観的な考え方をするのは、正しいことではないと思うのであります。」

ここにいわれている悲観的な記事とは、St. Mary de Bow の Lecturer であった Joshua Smith による “Meditation on the Vanity and Brevity of Human Life, wrote [*sic*] in Imitation of the Psalms” である。なおこれは、*Boston Gazette* から転載されたものであった。

彼はさらに続ける——

「この世はいと素晴らしい。思うに、自分の行為に注意してさえいれば、人生において成功することは間違いないのであります。私は、人の一生は短く苦悩に充ち充ちていると嘆くヨブの考え方は、正しいとは思いません。もし人の一生が苦悩に充ちたものであるならば、短ければそれに越したことはないのでありますから、二つのことは同時に、嘆き悲しむ理由になるものとは考えられないのであります。」

Franklin は悩み事を羅列することにいらだちを感じ、彼の文才をもって Smith の人生観をパロディー化したのであるが、彼のこのようないらだちはどこに由来し、またそれは何を意味するのであろうか。

ここにわれわれは、当時アメリカ第1の都市 Philadelphia において、着着と社会的地位と富を築きつつあった青年 Franklin の意気込みを感じるのである。つまり Franklin の言葉のなかに、政治的にも経済的にもようやく成熟期に入らんとしていたアメリカ植民地社会に生きた新興ブルジョワの、自信と、野心と、現状肯定の考え方がうかがえるのである。ここには神は正義をもって善人に報いるべきではないのか、なぜ善人は苦しまなければならないのか、あるいはどの程度長く苦悩を耐え忍ばなければならないのかといった、懐疑はない。まず正しく生きること、正しく生きようとする意志が肝

心なのである。不幸な結果は自分の怠惰が招いたものであるとし、その責任を「全知全能の神」に帰すのは道理にかなったことではない、賢明なことではないと、Franklin は力説するのである。

このような Smith への批判およびヨブへの批判的な言及を、どう見たらよいのであろうか。これを、旧約聖書にたいする理神論にの側からす攻撃の典型と見ることは容易である。あるいは、Franklin には「ヨブ記」の神学的・哲学的意味を解する努力が欠けていると、逆に Franklin を批判することもできる。しかし理論上の問題としてとらえるよりは、ここには彼のパーソナリティ、もしくは広い意味での気質 (temper) の問題がかかっていると見るのが妥当であろう。彼にはすでに、「ヨブ記」を批判的に判断できる生活体験というものがあつた。アメリカ社会の将来性・発展の可能性に照らしてみても、「成功」の確率のほうが「失敗」より高いとするのが当時の時代風潮であつたとするならば、Franklin がその時代のよき代弁者であつたといえるのではなからうか。以上の点を考えると、思想的にも情情的にも、Franklin はヨブの悩みを字句通りに受け入れることはできなかったという結論が出てくる。

彼は、“The Parody” を次のようなスタイルで結んでいる。A は Smith の原文、B はケーキを食べながらケーキが減るのを悲しむ子供の言葉（原文ではイタリック）であるが、Franklin の思想をよく表わしている。

- A. われわれに与えられた日は短く、空しさに充ちている。最大の喜びのなかにも、悲しみのかげが宿る。
- B. われわれに与えられたケーキは少ししかない。それなのにみなイーストでふくらましてあるだけだ。最上のしょうが入りのケーキも、はえの糞で汚されている。
- A. 過ぎし時は夢のように消えてしまった。来るべき時は、まだ来ない。
- B. 食べてしまったケーキはもうどこにもない。まだ来るはずのものは、まだ焼けていない。

(中略)

- A. 長生きすればするだけ余命は短くなる。そしてわれわれは、最後には一魂の土になるのだ。
- B. 食べればそれだけケーキの残りは少なくなる。そして食べたものは、最後には……おっと失礼！これ以上、口に出してはいけない。
- A. ああ、この世は何と空しい哀れなのか。これは全く真実である。
- B. ああ、何と空しく哀れなケーキ屋よ。

“The Parody” と対をなして掲載された “The Optimistic Meditation” は Franklin の思想をポジティブな形で表わしている。そこにかがわれる神への信仰・従順は、すでに前章で見たものである。

「他のいかなる被造物にもまして、太陽の輝く光を見、地のかぐわしき果実を享有できるわれらはいかに幸せであるか。」

そして彼は、この世で幸せな人間は死を怖れることはないと強調し、次のようにいう。

「もしわれらが、可能な限りの善を尽し、可能な限りのことを成し遂げた後は、善人にとって、死はもはや怖るべきものではなくなるであろう。

死期が間近に迫ったならば、われらは心からの称讃と感謝の気持をもって、われらに魂をさずけ給うた永遠の存在である神に、われらの魂をお返ししよう。

そして、長き旅路の後の疲れた旅人に寝床の心地よく感じられるごとく甘き死の眠り、就くのである。」

青年時代に書かれたこの言葉の通り、Franklin は 80 余年の波瀾万丈の一生の後、「甘き死の眠り」(“the Sweet sleep of death”) に就いたのであった。

Ⅲ 『ヨブ記』は聖書の一部にあらず』(Paine のヨブ観)

次に、Paine の理論において、「ヨブ記」がどのような位置を占めたかを見

てみたい。

彼は前に紹介した *The Age of Reason* において、「詩篇」第19章と「ヨブ記」の数章は、いずれも「真実の理神論的記述」であると書いている。しかも、彼がとりわけ「ヨブ記」を高く評価しているのは興味深い。*The Age of Reason* は2部からなり、Part Iは理神論の「科学的」根拠を説き、Part IIにおいて旧約ならびに新約聖書の考証を行なっている。Part IIにおいては、また道徳の実践についての彼の考え方が展開されている。

Paine は「ヨブ記」を、まず第一に、それが「科学的」観察にもとづいているという理由で、第二に、それが高い道徳的格調を有しているという理由で、高く評価する。

ここで重要なのは「科学」という言葉である。彼はそれを二つの意味に、すなわち一つには、神の存在をそのなせる業（自然）を通してのみ見ようとする態度を指し、もう一つには（狭義に）天文学を指して用いている。第一の意味において「ヨブ記」が科学的であるというとき、自然のみを神の言葉として見なす彼の見解と、一致する⁹。したがって「今日、自然哲学と呼ばれているものは科学全体を包摂し、天文学がその主要な部分を占める。それは神のみ業と神の全能・叡知についての学問であり、真の神学である」というとき、Paine が何をもって「科学」としているかはきわめて明白である。¹⁰

彼は、「ヨブ記」のはヘブライ人以外の、「科学的精神的に培われた」人物によって書かれたという提起をする。具体的には、たとえばプレアデス、オリオン、北斗というような天文学上の名称は、ヘブライ人ならば決して用いなかったであろう点を、指摘する¹¹。

「神は北斗、オリオン、

プレアデスおよび南の密室を造られた。」（第9章第9節）

「あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。

オリオンの網を解くことができるか。

あなたは十二宮をその時にしたがって引き出すことができるか。

北斗とその子星を導くことができるか。

あなたは天の法則を知っているか。

そのおきてを地に施すことができるか。」（第38章第31—33節）¹²

（第38章は「ヨブ記」のなかで、最も美しい自然描写を含む。）

次に、Paine のいう「ヨブ記」の道徳的格調の高さについてであるが、彼によれば、ヨブは、神（自然）の力と善意とを疑わず神を称えた人物、そして神の恵みを受けるにふさわしい資格をそなえた人間として、われわれの前に登場するのである。人間の道徳性が、人生の数々の試練に立ち向かい、それを克服しようとする意志の強さによって決定されるとするならば、ヨブこそ道徳的な生き方をした人物であった。彼はいう、「ヨブのなかにわれわれは、折りは見ない。敬慕と従順さを見るものである。」¹³

他方 Paine は、ヨブが聖人であることを期待していたわけではなかった。

「この書の扱う人物の性格には、忍耐強さという面はあまりない。彼の嘆きは、しばしば性急すぎる。しかしそれでいながら、自分の嘆きを抑えようと努力し、積み重なる災禍のなかでも、それが当然の運命であるかのようにいい聞かせようとするのである。」¹⁴

ヨブが、自分に課せられた運命はいさぎよく受け入れるべきであると知りながら、思わず不平をもらすという弱味をもった普通の人間であったことに Paine はひかれたのであるまいか。

Paine が「ヨブ記」の科学性および道徳性を強調したということは、逆に見れば、聖書の他の書が科学的でないこと、あるいは——Paine のいう意味で——道徳的ではないことを意味する。事実、*The Age of Reason* は、聖書はヘブライ人のようにいわゆる神の言葉の記録ではないこと、伝統的な信仰は聖なるものではないことを示すために書かれたのであった。伝統的（啓示）宗教の否定が、この書物を通じての一貫したテーマなのである。

このような理由で、彼は聖書の寓話的要素を批判するのであるが、ヨブは神に祈るならば救いが得られるという寓話を信じなかったゆえに、Paine が

ら見て勇気ある人間に映るのである。ヨブは超自然的な力の介在（奇跡）を期待せず、自分の理性の力を信じたと、Paine は主張する。

「ヨブ記」および「詩篇」第19章を高く評価する度合に応じて、Paine は聖書全体の権威を批判するのであるが、さらに二つの理由から、「ヨブ記」は聖書の一部ではないことを示す。

まず、この書には「裏切り行為も虐殺も含まれていない」点である¹⁵。

Paine は聖書（彼が聖書というとき、旧約聖書を指す場合が多い）の半分以上は、「卑わいな物語、野蛮で残忍な処刑や、執念深い復讐の話によって占められている」とし、「神の言葉というよりは悪魔の著作と呼ばれて、しかるべきであろう」と書いている¹⁶。つまりユダヤ民族を他のすべての民族の犠牲において偏愛するような行為は、神の名にふさわしくないのである。これが聖書全体の傾向であることを考えた場合、神への賛美にあふれる「ヨブ記」が聖書の一部であるとは到底思われぬ、というのが Paine の主な論点である¹⁷。

最後に——「悪魔」への言及があったことと深く関連するが——Paine は Spinoza などの権威を引用し、旧約聖書のなかで「サタン」が現われるのは「ヨブ記」だけであり、その性格はきわめてヘブライ的ではない、といい切る。「ヨブ記」では、「サタン」は悪の権化として、むしろ神と対等の関係にあるとされる。つまり善悪二元論的な考え方がここには示されているのであり、一元論のヘブライ神学と性格を異にするというのである。そこで Paine は結論として、「ヨブ記」は本来ゾロアスター教を信じていたペルシア人またはカルデア人の手によるものではないか、という仮説を提起する¹⁸。このような仮説は、聖書はユダヤ民族にゆだねられた神の言葉の記録であるという伝説的な信仰態度を否定することになるが、この点がまさに、*The Age of Reason* の主要論点なのである。（「ヨブ記」の序曲〔第1—2章〕および終曲〔第42章第7～17節〕は、従来一つの物語として古い民間伝承にもとづくものであり、それを「ヨブ記」の著者が素材にし、他の部分を加えたとする

かぎりにおいて、Paine の評釈は正しいといえよう。

む す び

以上、Franklin および Paine の著作における「ヨブ記」への言及の意味を、主として両者の神観あるいは道德観との関連において検討してきた。何にもまして、個人による道德の実践の最高の形を、神を敬い忠誠を尽すことにあるとした点が、両者に共通する思想であるということが指摘された。むしろニュアンスの相違はあれ、Franklin と Paine が人間の生のあり方の一つの典型としてヨブを選んだことは、18世紀アメリカの啓蒙主義的風潮を知るうえで興味ある示唆を提起している。

すなわち両者において、体験的——もしくは実践的——宗教観が支配的であったこと、およびそのような宗教観が彼らの「ヨブ記」の解釈を決定したのであった。Franklin は彼の生活体験から、人生において嘆くことは敗北であり無益なことと考えるようになっていた。彼の記述はユーモラスであり、ともすれば読者はその真意を見失いがちであるが、そこには鋭い現状分析と生活感覚（自信と野心）がにじんでいる。彼が、ヨブの嘆きは肯定できないという態度を取ったのは当然である。

他方 Paine は、Leslie Stephen の言葉を借りるならば、「従来発見されていた教説を新鮮な感覚で取り上げ、それらを強烈な言葉で世に述べた」のであった。彼は「民衆の誤謬を暴露」することをめざした。¹⁹ 彼の表現は平易であり、感情のほとばしりが感じられる。しかし既存宗教を批判するにあたりあまりに性急であり、戦闘的である。しかも、証明も稚拙な点が少なくない。しかしかりに両者がアメリカ啓蒙思想を代表——少なくとも象徴——するものであるならば、18世紀アメリカの「知的雰囲気」は、思索的であるより実践的、悲観的であるより楽観的、理論的であるより直観的であった、という結論が出てくる。そして、このことは、とりも直さずアメリカ啓蒙思想には、従来考えられていたよりはアンチ・インテレクチュアルな要素が存

在していたことを意味するものである。

(1974. 10. 26)

注

- 1 理神論については、[Basil Willey, *The Eighteenth Century Background* (London, 1953) を参考にした。
- 2 Leonard W. Labaree, ed., *Papers of Benjamin Franklin* (New Haven, 1959-), I, 51-71. 以下、引用はすべてこの版による。
- 3 *The Age of Reason*, Moncure D. Conway, ed., *The Writings of Thomas Peine* (New York, 1908; Reprinted in 1969), IV, 21, 45.
- 4 *Ibid.*, 47, 193.
- 5 *Ibid.*, 8-9.
- 6 戦闘的理神論については、拙稿「リパブリカン宗教と第二の覚醒」『同志社アメリカ研究』V (1968年) 参照。
- 7 鶴見俊輔訳『フランクリン自伝』(東京 旺文社 昭和41年), 142ページ。
- 8 “The Parody”ならびに“The Optimistic Meditation”を *Pennsylvania Gazette* に見出し、Franklin の著作であるとしているのは、Alfred O. Aldridge, “A Religious Hoax by Benjamin Franklin,” *American Literature*, XXXVI (1964), 204-9 である。出版の状況および内的証拠から、これらの小品の著者は Franklin 以外には考えられないとしている。
- 9 第I章(1)参照。
- 10 *Ibid.*, 50.
- 11 *Ibid.*, 124.
- 12 使用聖書は、日本聖書協会1955年改訳。
- 13 “Answer to the Bishop of Llandaff,” *Writings*, IV, 275. Llandaff 主教は、伝統的の神学の立場から、*The Age of Reason* にたいする反論を試みた一人である。
- 14 *Ibid.*, 124.
- 15 *Ibid.*,
- 16 *Ibid.*, 34.
- 17 *Ibid.*, 123-4.
- 18 *Ibid.*, 275.
- 19 *History of English Thought in the Eighteenth Century*. 中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』全3巻 東京 筑摩書房 1969年) 中巻, 164, 166ページ。

Synopsis**Benjamin Franklin and Thomas Paine on
*The Book of Job***

Norio Akashi

The basic assumptions of the present paper are first that the intellectual temper of the 18th-century America was optimistic, dynamic and humanitarian, and secondly that such temper by and large corresponded to the material prosperity of the society as a whole on the one hand and the self-confidence of a rising people on the other. In the area of religious life, the humanitarian and optimistic tendency—or what is generally known as secularization—was quite noticeable. Notwithstanding the criticism to the contrary that secularization was more apparent than real, I see the religious temper of the period as markedly different from that of the preceding one.

There is a third assumption: that given such an intellectual environment, *The Book of Job* would have naturally met a different reception from in other times. This explains why an attempt is made in this paper to examine how it was read in the 18th-century America.

The two men selected for this purpose are Benjamin Franklin and Thomas Paine, who both in their own ways were representative figures of the Enlightenment mind. They believed in a God whom they admired and worshipped with much veneration; they held an equally strong belief in the necessity of morality, the importance of practicing moral precepts which were derived from their views of God and the Universe—e. g., frugality, industry and chastity.

If there were differences between them, Paine was more militant than Franklin. That is to say, Paine was strongly critical of the established religions and went even to the extreme of advocating the abolition of all established churches as corrupt and misleading ; while Franklin was more moderate, i. e., more tolerant toward traditional creeds and practices. These differences showed themselves in their readings of *Job*.

Franklin was, perhaps more so than Paine, the epitome of the dynamic and libertarian quality of the 18th-century America. It is no wonder that he could not sympathize with Job so much whom he thought as a complainer. Nor did he seem to try hard to understand the theological and philosophical meanings of Job's skepticism. Franklin was so sur that God's benevolence was on and with him and his fellow Americans that he could but foresee only a bright future for individual Americans and society as a whole. Who but himself could be a better proof of this optimism?

Paine did not believe in any books of the Bible because they were mere fables or so fabulous--except *The Book of Job*. He read it as a book of astronomy ; it was scientific. When Paine talked about science, however, it meant God's benevolence and omnipotence revealed in visible nature. And he has a theory that *Job* could not have possibly been written by the Jews who did not have advanced knowledge of astronomy.

If it is an overstatement to say that both Franklin and Paine missed the religious and philosophical message of *Job*, for which it has been widely acclaimed, at least they did not read it as a statement of the problem of why good men had to suffer. Perhaps they did not have to do so ; their very life style and the fact of their successes did not require them to do so. If this is so, we have another evidence that the

18th-century American thought was characterized not so much by a coherent system of ideas and ideals as by a buoyant and pragmatic temper, if lacking in depth and organization.